

新古今の歌一首 田尻嘉信

◎

新古今の歌風が、感慨を率直、端的に表明する「万葉集」の現実的な抒情と質を異にしていることは、一見明らかである。俊成は「古今集」を歌の本体として重んじた。その優美典雅な歌の世界に、新しい時代の歌風の源流を見いだしたのであった。かれは「古来風体抄」の中に、「古今集」から数多くの読人不知の歌を引き、嫡流の定家も、「近代秀歌」に小町・業平たち六歌仙をあげて歌の規範を暗示し、また「定家八代抄」に「古今集」の大部の古歌群を抜きだしている。新歌壇を導いた両者が父子相伝で貫いたのは、作者の心の世界を深くゆたかにするものとして、「古今集」でも貫之たち撰者より一時代前の古風な歌に、かえってこの詩型のもつ抒情の本質をみきわめたことにほかならなかった。いわゆる古

今的な理知の冷やかさよりは、素材や対象の実感をそのままに生かして迫る古風な抒情に永遠に受けつがれてゆく歌の生命を感じたのであった。

もちろん、古今を旨とすべしとの発想が、ただ復古や追従を眼目としていたはずもない。「古今集」の古歌の面影をつたえ、真実味のある情感という面で、「新古今集」に求めれば西行の存在がある。後鳥羽院は西行を「生得の歌人」としたが、しかし、実情的な色の濃い西行の歌が、「新古今集」で九十四首という最高の入集数を数えたことは、それが新古今歌風と異質なものでも、また不調和なものでもなかった証拠である。西行の歌にむしろ、新古今歌風の底辺を支える抒情の姿があり、また一面、伝統的な抒情の本質、いわばその不易な姿があったというべきであろう。歴代の撰集に較べて極めて出色な、この詩型の極限の一点を示した「新古今集」

も古今的な延長の上に、そのゆたかな伝統のあらわれをみたことにほかならなかつたのである。

それというのも「新古今集」の撰進を促したものは、次第に不如意を増した末期的な自覚による歴史の危機感であり、それを母胎とする作歌の意識であつた。作者の斜陽的な心境に根ざした詠嘆の深さが、和歌史の系譜の新たな自覚となつて、いよいよ自主自立を希う心を切實にはたらかせたのである。その点では、西行は、「生得の歌人」ということにおいて別格の座を占めるもので、その歌のような実感の滲みでた自然さ、清新さを持つとするものを期することは、多くの場合、極めてむづかしかつた。歴史の転換期に際して、いきおい強靱な新風への期待は、日常卑近な詠嘆を離れ、作歌の自負からしても技巧的、構成的に一途の執心による制作精進にかけられないわけにゆかなかつたのである。

◎

新古今歌風については、従来様々に論ぜられて来た。具体的には、本歌取のような古歌の撰取や、物語を想わせる場面の設定、心理の抽出など、その独自の作歌の方法があり、またそれにふさわしい磨かれた詞の感覚による修辭技巧の駆使がある。それらが交々、余情含蓄に富んだ歌の世界をもたらしたのであつた。その歌風を象徴する「幽玄」の一語も、実

はそれほど自明な概念内容を定められているわけではない。個々別々の審美内容の検討の後に、あらためて考えられているようである。たしかに「新古今集」を丹念に一首ずつみてゆくと、それぞれに特色があつて、一概簡単にその歌風を説ききえることはむづかしい。そこでもっとも新古今の歌風を濃くみせている定家の歌を、いま手はじめにあげてみよう。次の一首である。

見渡せば花も紅葉もなかりけり浦のたまやの秋の夕暮
「拾遺愚草」によれば、文治二年の「二見浦百首」の中にみえる。正治二年の「三百六十番歌合」の中にも出ている歌である。

文治二年は、定家二十六歳の時である。治承年間、俊成から「古今集」「後撰集」の口伝を受けた後、「初学百首」(兼和元年 二〇歳)、「堀河院題百首」(寿永元年 二二歳)、「賀茂社歌合」(元暦元年 二三歳)が主な作歌経歴である。この中で「堀河院題百首」については、父母はじめ周囲が賞讃したほどであつたが、「拾遺愚草」員外に、

自文治建久以来、称_二新儀非_一抛_二達磨_一歌_二為_三天下_一貴賤_一
被_レ惡、己欲_二棄置_一、及_二正治建仁_一蒙_二天満天神_一之冥
助、応_二聖主_一聖朝之勅愛_一僅_二繼_二家跡_一

と、往時を回想する記録のあるのが注目されるのである。

定家の作歌精進は懸命であつた。乱世の政治社会に背を向

けてひたすら三十一文字の世界に傾倒した。父俊成が歌壇を指導する立場にあったこと、また父に従って文治二年、はじめて学芸愛好の九条家に仕えたことの二点は、若き定家に極めて大きな恩寵であった。その刻苦勉勵がおのずから新風開眼をもたらしただけであつたが、「堀河百首」の名声にもかかわらず、衆愚の容れるところとならず、その巧緻難解の故にか、様々の清新作歌が、いたずらに達磨歌の異名を蒙つたのであつた。正治二年「後鳥羽院初度百首」までの約十年の歲月は、定家の自負と迷妄との交錯した、苦渋に充ちた一時期にはかならなかつた。

「二見浦百首」は、その時期に西行の勧めに成つたものである。世評はとも、れ、歌壇の長老西行の期待に応えるべき、定家の積極的な意欲と努力とに貫かれた百首として、その内容は、新しい時代の心をもつて描こうとした心象の数々を示していたと考えられる。「古今集」以来の和歌の歴史は、定家の心にかゝるところであり、恐らくは従来の歌の模倣にはじめて抒情の本質への覚醒と新風への憧憬が、かれの若き心をみたしていったにちがひなかつた。一方に散文の衰退の事実があり。漸く公家の正統の文学として、この詩型の存在の意味は深く意識されて来た。文学的な欲求や期待のすべては、歌の世界にかけられて、それだけに新生面を拓いてゆく労苦をつぶさに味わなければならなかつたはずであ

る。

さて「花も紅葉も」の一首については、古来、諸種の見解が示されて来た。季吟の「八代集抄」は簡明に次のように述べている。

阿義有、此浦の苦屋の秋の夕を見渡せば花も紅葉もなきに、いふよしもなき景氣有といふ説有。又此浦の苦屋の秋の夕暮の景には、花も紅葉もいらすと心の云ふ、然れども始めの説感深しと師説也。

ここにいう師説は貞徳であるが、簡明なこの見解をうけて、宣長の「美濃の家づと」は次のように述べている。

二三の句、明石巻の詞によられたるなればけれど、けりというることいかが。其故は、けりといひては、上句、さぞ花紅葉などありて面白かるべきところと思ひなるに、示てみれば、花紅葉もなく、何の見るべき物もなき所にありけるよしといふ意になればなり。そもそも浦の苦屋の秋の夕は、花も紅葉もなかるべきはもとよりのことなれば、今更なかりけりと歎すべきには、あらざるをや。われならば見渡せば花も紅葉もなには漏あしのみるやの秋の夕暮などと詠まましとぞ或人のいへる。

甚だ理智的な発言であるが、それだけに実景として据えて興味が失なわれる。ことに傍点をつけた部分は、言われてみれば理の当然であるが、それだけならばこの歌の作意や意図

の詮索は無用の趣ともなろう。その点、正明の「尾張の家づと」は、ある歌の感を捉えている。

一首の意は浦の苫屋の秋の夕暮を見渡せば、花紅葉の事も忘れてあはれにをかきけしきぞと也。俗にいはいは花もいらぬが紅葉もいらぬといふほどの事也

とあって、「八代集抄」の後の見解をいれたもののようにである。塩井正男の「新古今集詳解」の

最早花をも紅葉をも、いふ事はないワイ。誠にあはれにをかきしいといふ事にて……

の註解は、これを受けたものといえよう。「尾張」の見解は、花紅葉にまさる景趣として、浦の苫屋の秋の夕暮を捉えたものである。

次に代表的な註解の諸説をあげてみると、

○「浦の苫屋の秋の夕暮」という、さみしい、むしろわびしい光景に心ひかれてそれを喜ぶ心でいつている。……最も喜ばしいものの花紅葉と対照させることによつて暗示している。

(窪田空穂氏「新古今集詳釈」)

○花も紅葉もなくて淋しい。秋の夕暮を面白くする見方は当時の歌の通念に遠いものがあり、「なかりけり」を、必要なし、問題にあらず、の如く解くのは非常に無理があるからである。

(石田吉貞氏「新古今集全註解」)

○目を楽しませべき花も紅葉もなく、満目蕭条たる風景を

いふ。

(小島吉雄氏、朝日古典全書「新古今集」)

○花の美も紅葉の美もない。ただ寂しいながめである。

(峯村文人氏、新註国文学叢書「新古今集」)

○浦の苫屋の秋の夕暮の寂しい風景のなかに、花や紅葉の美しさにもましての一種の美的情趣を感じて詠んでいることは確実と想われる。

(安田章生氏「新古今秀歌」)

○花も紅葉もないが面白く、また物哀れであるという趣。

(久松潜一氏外、岩波古典文学大系「新古今集」)

以上をみれば、大体、幽寂、枯淡の景趣をもって捉えられているようである。観念か実景かで、かなり歌趣も風情も異なるようであるが、昭和初期の斎藤茂吉、谷鼎両者のはげしい論争もそれにかかわる面をもっているようである。前者が、淋しさを中心とした実景として捉えたのに対して、後者は、題詠として花紅葉も及ばない意のさびしさ、深さを認めたのであった。

「秋の夕暮」に関しては、すでに「枕草子」の著名な一節が殆ど定着して、「秋の夕暮」と体言止めに終る歌が、「国歌大観」によると九十二首の多きを数え、それがいずれも、寂寥哀愁の気分や情趣を主題としてもっている。定家の一首が、その例にならって幽寂、枯淡の情感を作意の根底にふまえていたことは、まずまちがいないところである。また、

「新古今集」によれば巻四、秋上、三七三番のところに配さ

れており、その配列順からいえば、この「紅葉」が、散りはてた末の秋の終りを示したものでないことも明らかである。従って、「花も紅葉も」は、「万葉集」以来並称されるのを常とした自然美を代表するものを示している。春秋の景物を花、紅葉とすることに伝統の美意識があり、それはそれで固有な風雅意識のあらわれでもあった。それを「なかりけり」と端的に否定するところに定家の新しい根本の発想があったのである。当然「浦の苦屋の秋の夕暮」は、花・紅葉に対照されるものであり、それにかわって诗情の中心に据えられたのである。これを単に実景と考えたのでは、宣長流の理屈の通りとなって、全く特別な感銘は起し得ない。定家の意図はその限りでは極めて平明、凡理の支配を示すだけで、ことさら「浦の苦屋の秋の夕暮」をもち来す味わいはないのである。

◎

「美濃」は、この一首が「源氏物語」の「明石」の巻によることをあげている。

はるばると物のとどこほりなき海づらなるに、なかなか
春秋の花紅葉のさかりなるよりは、ただそこはかなうし
げれるかげどもなまめかしきに……

の一節に暗示されたとみたわけであり、この部分が夏のこと

を叙した点とはかく、発想の背景として、想像されないことはない。もちろん、確証があるわけではない。ただ「明石」の巻の一節が関心されたとすれば、それよりは猶更、巻々の名は定家の歌囊のうちにあったであろう。優美な宮延生活を描いた「紅葉の賀」「花の宴」の両巻がそれである。

定家には、すでに「初学百首」に若干、「源氏物語」に出典を仰いだ作品がみられる。

さつきやみくらぶの山の時鳥ほのかなる音に似るものぞ
なき

月影を葎の門にさし添へて秋こそ来れ訪ふ人はなし(桐遊袖)
袖の上は左も右も朽ちはてて恋はしのばむ方なかりけり

(須磨)

などがそれである。それは作歌に寄せる定家の進取の精神を示すものであり、あるべき新時代の作法の一態を、そのような物語の撰取に描いていたことになる。初学の時期における習作の域を出ないものであったとしても、その試みは、新風の出現のきっかけになるべき重要なことといわなければならぬ。「花も紅葉も」の一首が、その線に沿うたものとすれば、花・紅葉に対する「浦の苦屋」は、甚だ意味深い表現を示している。それはどう考えても艶美な風趣とは対極をなす、人間の理智や感情を越寂寥と無常との世界である。酷薄な自然の象徴するものが、寂漠とした運命のもとに、ある存

在を心象に描いてのことと考えることも、あながち不当とはいえない。

この定家の一首を含めて、「新古今集」の配列順で、三六一、三六二とこれら三首は、いわゆる三夕歌と呼ばれているものである。周知のように、寂蓮、西行の歌は、

寂しきはその色としもなかりけりまき立つ山の秋の夕暮
心なき身にもあはれは知られけり鴨立澤の秋の夕暮

この二首であるが、三夕歌がいずれも三句切、体言止の構造をもち、山・澤・海と場面の相異はあるが、ともに「無」の問題を捉えることを作意としていることが注目される。定家の描く「無」は、「源氏物語」との関連で見れば、光源氏の須磨流謫事件があたるものとはいえそうである。また白詩の

蘭省花時錦帳下 盧山夜雨草庵中

を念頭にしたとの推察もあるが、直接の結びつきには若干無理があり、これからの連想では俊成の一首

昔思ふ草の庵の夜の雨に涙な添へそ山ほととぎす

の方が自然である。暗示は多少受けたにしても、「花紅葉」から「浦の苦屋」の素材の接続するところからは、桐壺帝崩御を境として変転するその運命を、昔と今の、栄華と落魄の現実との対比によって冷厳に暗示しているといえるのである。もちろん、歌は歌、物語は物語であって、この一首が光

源氏流謫の簡便な再現を謀っているわけではない。方法の上の新しさを奇貨として詮索を逞しくすれば、作歌の意味は傷つけられるはかばかない。

「花も紅葉も」の一首をそのような物語取の歌と考えれば、新古今歌風に特色的な本歌取、漢詩に本説を仰ぐ方法と共に、極めて内面的な、そして中世的な心象処理の一面を示したことになる。それが若年の作であるため、ことに上句には觀念の匂いが濃く、定家の意図も十分に理解されない恐れはあった。後鳥羽院が隠岐本に除棄した理由の一斑も、そのような斬新・遠慮の作風をとらえ得なかったことによるのかも知れない。

新古今歌風がその生成にあたってとった複雑なこの手続きは、その十分な享受にあたって再び還元してみることによって真実の理解をもたらすものであろう。物語取の分野では、さらに多くの歌が解明を要する段階にある。物語の世界に遡及してまでも、独自の領域の開拓につとめたとするかぎりにおいて、「新古今集」の歌は、作者の一小主観の表出にとどまらず、文学に寄せる期待や欲求を一身に負うことができたのであった。その最高、完全な美のかたちを象徴とよぶことができるのである。